

横浜市立 子安小学校

学校評価報告書

(令和 7 ~ 9 年度)

重点取組分野	令和 7 年度		総括	重点取組分野	令和 8 年度		総括	重点取組分野	令和 9 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①子どもが自分の思いや考えを表現する力を高めていくために、各学年で目指す子どもの姿や系統性を共通理解した上で、校内重点研での学びを日常の授業に生かしたり授業改善に取り組んだりする。 ②子ども一人ひとりの学びを充実させるために、日々の観察と学力状況調査や体力テスト等のデータを分析・活用し、授業展開の工夫や改善を行う。	①重点研究を中心に学年で目指す子どもの姿を明確にして、授業研究を行うことができた。来年度は、重点の学びだけでなく、日々の授業の中でも子どもが自分の思いや考えを表現する力を高められるような活動を意識して取り入れていくようにしたい。 ②タブレット端末を活用することで、校内および家庭での学びを充実させることができた。一方で、学力状況調査と体力テスト等のデータを分析・活用する機会を今後とも増やしていきたい。	B	授業改善	①子どもが学んだことを自覚し、自分の思いや考えを表現する力を高めるために、国語の系統性を共通理解した上で、今までの学びの積み重ねを生かした授業づくりを行う。 ②子ども一人ひとりの学びを充実させるために、日々の観察と学力状況調査や体力テスト等のデータを分析・活用し、授業展開の工夫や改善を行う。			授業改善	c1		
道徳教育	①粘り強さや自他を思いやる心を育てるために、道徳の時間を中心として全教育活動において意識した活動を行う。 ②自尊感情を高め、多様性を認め合う関係性を構築するために、アンケート結果や学年の実態に応じた人権月間や横浜プログラム等を活用した取組を行う。	①行事等と関連させながら、道徳科の授業を行ったことで、道徳科だけでなく日常でも道徳性を育むことができ、昨年度よりも数値が微増した。次年度も日常と関連させていくことができるようにしていく。 ②アンケート結果や学年の実態に応じた取組を行ったことによって、多様性を認め合う関係性を構築する姿が見られた。自尊感情を高める取組については、今後とも取り組んでいきたい。	B	道徳教育	①粘り強さや自他を思いやる心を育てるために、道徳科を中心として全教育活動において、より意識した活動を行う。 ②自尊感情を高め、互いの個性を認め合える関係性を構築するために、アンケート結果や学年の実態に応じた人権月間や横浜プログラム等を活用した取組を行う。			道徳教育	c2		
健康教育	①運動を楽しんだり体力を向上しようとしたりする姿を育むために、中休み等を利用して全校で体力向上に向けた活動を行う。 ②子ども一人ひとりが自分自身の心と体に目を向け、元気に学校生活を送るために必要なことを学ぶことができるように、毎朝のL・gateでの健康観察等を元にして、健康教育を行ったり掲示物を作成して活用したりする。	①今年度は長縄チャレンジを月に一回にたことにより、これまでよりも継続して続けることができた。一方で、児童の体力(健康)課題にあてていないという点もあったため、来年度はより児童の課題に合わせた体力向上の取り組みを行っている。 ②L・gateを見る機会を確保することができ、それに伴い健康教育を行ったり掲示物を作成することが難しくかった。また、学年があがること回客率の低下が見られた。今後は、担任と連携し毎朝の自分自身の体力向上に取り組んでいきたい。	B	健康教育	①運動を楽しんだり体力を向上しようとしたりする姿を育むために、体力テストの結果を分析しながら、中休み等を利用して全校で体力向上に向けた活動を行う。 ②子ども一人ひとりが自分自身の心と体に目を向け、元気に学校生活を送るために保健委員会や学校保健委員会を中心に、健康に過ごすための実践意欲を養っていく。			健康教育	c3		
自分づくり教育	①友達やまちの人と関わりながら解決するよさや楽しさについて実感できるように、生活・総合の時間の単元づくりを工夫する。 ②子ども一人ひとりが挨拶のよさを実感し、気軽に挨拶し合うことができるように、児童会活動や縦割り活動等を中心に他学年との関わりを増やす。 ③将来の自分のなりたい姿をイメージして、友達の意見を取り入れながら自分で意思決定できるように、特活部を中心に、自分づくりパスポートの活用方法を考える。	①様々な人と関わりながら解決するよさを感じる単元づくりが概ねできた。計画性や組織的な連携の強化を今後も継続していく。 ②たてわり活動を中心に、他学年との関わりを増やすことができたと感じている。その関わりから挨拶につながるようなことができるように委員会活動を中心に継続して考えていきたい。 ③子どもたちがめあてを意識して振り返りまでできるように、自分づくりパスポートを活用することができた。自分づくりパスポートを学活(3)とつなげて、授業をすることには、特活部を中心に来年度も継続して考えていく必要がある。	B	自分づくり教育	①友達やまちの人と関わりながら解決するよさや楽しさについて実感できるように、生活・総合の時間の単元づくりを工夫する。 ②子ども一人ひとりが挨拶のよさを実感し、気軽に挨拶し合うことができるように、たてわり活動を生かした活動を児童会活動を中心に考えていく。 ③将来の自分のなりたい姿をイメージして、友達の意見を取り入れながら自分で意思決定できるように、特活部を中心に、自分づくりパスポートの活用方法を考え、校内に発信していく。			自分づくり教育	c4		
いじめへの対応	①子ども一人ひとりの見取りを大切にし、日常的に安心して子どもが教職員に相談できる関係性を構築することができるように、定期的なアンケート、日々の健康観察、教育相談等を通して状況の把握に努める。 ②いじめ等問題行動に対して学校が早期発見し、組織的に対応するために、児童支援専任を中心とした指導・支援体制を整え、教職員が連携して対策を考えたり対応したりする。	①アンケートや校内での情報共有等をもとに、日々児童の状況を把握し、いじめの未然防止に努めた。引き続き様々な教師と児童とが関わる機会を設け、誰にでも相談しやすい環境づくりに努めている。 ②いじめ等問題行動や気になることがあったときに、速やかに校内で情報共有を行い、複数の教員で対応する組織としての意識が高まっている。今後も情報共有しながらよりよい指導・支援体制を整えられるように連携していきたい。	B	いじめへの対応	①子ども一人ひとりの見取りを大切にし、日常的に安心して子どもが教職員に相談できる関係性を構築することができるように、定期的なアンケート、日々の健康観察、教育相談、教科担当制による複数職員による指導等を通して状況の把握に努める。 ②いじめ等問題行動に対して学校が早期発見し、組織的に対応するために、児童支援専任を中心とした指導・支援体制を整え、全教職員が連携して対策を考えたり対応したりする。			いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	①働き方を組織的に改善していくために、各職員が校内における役割を担いながら学校運営に主体的に関わりと同時に、ICTの活用や既存の取組の見直しを行う。 ②メンターチームを中心に、教職員間での関わりの充実を図るために、研修前や研修後に、悩みや授業づくりについて相談できる時間を確保する。	①働き方改革の視点をもちながら、ICTの活用や既存の取組の見直しを推進できた。各職員がそれぞれのキャリアに応じて学校運営に主体的に関わる姿も見られた。 ②研修前や研修後に悩みや授業づくりについて相談できる場を確保することで、メンター同士の職員の関わりの充実が図ることができた。また、先輩の先生方に研修をしていただいたり、研修後の相談に参	B	人材育成・組織運営(働き方)	①働き方を組織的に改善していくために、各職員が主体的に自らの業務やステップアップした業務に取り組めるような職場づくりを進めるとともに、ICTの活用や既存の取組の見直しを推進していく。 ②メンター職員間でのかかわりを充実させるために、引き続き、悩みや授業づくりについての相談会は継続していく。そのうえでさらに、授業力の改善を図るため、授業を通して話し合えるような時間を設け			人材育成・組織運営(働き方)	c6		
地域学校協働活動	①地域とのつながりを広げたり深めたりして、地域と共に歩む学校づくりを推進するために、学校運営協議会で学校づくりについて議論し、その結果を職員全体に周知して学校運営に生かしていく。 ②今まで以上にこやすキラキラ応援隊と連携をとりながら学習を進めていくために、依頼の内容を明確にして伝えたり、保護者・児童にこやすキラキラ応援隊の活動がより伝わるように紹介・発信したりしていく。	①学校運営協議会の議題を職員から募ったり、学校が抱えている課題について協議会の場で話し合ったりすることができた。職員全体への周知については今後も工夫が必要である。 ②保護者および児童において、子安キラキラ応援隊の活動への理解と感謝の意識が高まり、学習活動は今年度も充実したものになった。次年度も引き続き、さらなる充実を図ってきたい。	B	地域学校協働活動	①地域とのつながりを広げたり深めたりして、地域と共に歩む学校づくりをさらに推進するために、学校運営協議会で学校づくりについて議論し、その結果を職員全体に周知して学校運営に生かしていく。 ②今まで以上にこやすキラキラ応援隊と連携をとりながら学習を進めていくために、依頼の内容を明確にして伝えたり、保護者・児童にこやすキラキラ応援隊の活動がより伝わるように紹介・発信したりしていく。			地域学校協働活動	c7		
特別支援教育	①子ども一人ひとりに合った指導や支援をするために、児童や保護者の思いに寄り添いながら児童理解を深めるとともに、作成した個別的教育支援計画や個別の指導計画を活用し、適切な支援や学びの場を提供する。 ②特別支援教育コーディネーターを中心として、学習環境の整備や支援を必要とする児童への関わり方について教職員の意識を高められるように、職員内で情報共有や研修を行う。	①職員一人ひとりが児童や保護者に寄り添いながら、より良い指導や支援を探ったり、個別の支援計画や指導計画の作成を通して、児童への理解を深めたりすることができた。作成した個別の支援計画や指導計画を有効に活用して、よりよい支援の手立てを職員全体で共有・実行できるように発信していく。 ②児童の実態把握やよりよい支援を検討する研修や発信を校内で行った。全職員で児童を育てるという意識を更に高められるように引き続き発信していく。	B	特別支援教育	①子ども一人ひとりに合った指導や支援をするために、児童や保護者の思いに寄り添いながら児童理解を深める。作成した個別の支援計画や個別の指導計画を定期的に見直す機会を設けることで活用を促し、適切な支援や学びの場をチームで検討し、提供する。 ②特別支援教育コーディネーターを中心として、学習環境の整備や支援を必要とする児童への関わり方について職員全体の意識を高められるように、情報共有や研修を行う。			特別支援教育	c8		
									c9		
									c10		
ブロック内評価後の気付き	今年度も、「情報機器の有効な活用」「小中学校の円滑な接続」「自己肯定感・自己有用感の醸成」をテーマとして授業研究会を行った。児童生徒の情報機器の活用能力は着実に向上しており、教育活動全体の中で情報機器を取り入れた場面を多く設定してきた成果が表れていると言える。一方で、情報モラル教育の必要性を改めて痛感させられる事例も増えてきている。今後は、児童生徒の発達段階や、彼らを取り巻く情報環境の現状を踏まえた、体系的な情報モラル教育の整備が急務である。また、子ども会議や小中交流の場面では、中学校生徒会がモデルとなる働きを見せているという意見も見られた。			ブロック内評価後の気付き				ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価	学校運営協議会では、学校教育に関するアンケートの結果をもとに、児童の自己肯定感の低下や挨拶への意識が低下していることを報告した。運営協議会の委員からは、昨年度同様、子どもたちが地域で進んで挨拶する姿がたくさん見られるとういご意見をいただいた。また、学校教育に関するアンケートについて、特に児童への質問については、児童の発達段階に合わせて質問項目になっているかについてもう一度確認するとよいという意見も出た。ICTの活用に関する議事の際には、ICT活用が進んできたからこそ、活用自体が目的にならないようにしていくべきという意見もいただいた。			学校関係者評価				学校関係者評価			
中期取組目標振り返り	全ての重点取組分野において、教職員の自己評価がB評価となった。ただ、地域学校協働活動については、児童・保護者ともにその理解が進み、教職員においても、充実した学びのためにキラキラ応援隊との連携を図るという意識が根付いてきていることが分かった。その一方で、「キャリア教育」や「特別支援教育」についての教職員の意識や理解の向上は今後の課題であると言える。次年度以降は、具体的取組の実現状況について振り返る機会を半期に一度程度設け、これまで以上に職員全体が中期取組目標の実現に向けて教育活動を進められるようにしていく。			中期取組目標振り返り				中期取組目標振り返り			